思い出

岡本生

当時、学二武田学兄(現病理学教室、高津学兄に語りし言葉)の言に依れば『八月九日は梅田教授の学部三年にたいしての病理各論の開講日であつた。病理教室の講堂は満員で「一般に人間の心臓の大きさは、ほゞその人の手のこぶし大で!」と語られた。その瞬間、閃光あり、学生一同教授の顔をみつめ、教授も学生を見渡された。瞬時にして教授の背側にあつた防火壁が倒れかゝると同時に教室全体が倒壊し、学生は机の下に潜り込んだ。教室は発火し、一部の学生は側壁の板のわれ目より脱出した。』とゆう事です。これが梅田教授の最後の御様子だと思われますが、その後の消息は不明です。また武田学兄も典型的の原爆症で亡くなられました。

法医学教室

八月一日の空襲により、当教室も落岩による被害があつた。尚当時の教室員は国房二三教授、徳川武夫助教授(内地召集中)と技術嘱託の山口与作氏、雇の黒川マツ子、傭人の吉田マサヱの各氏であつた。

被爆時の状況

国房教授は教室で被爆、翌日小児科の地下室に救出され其後桜馬場町の自宅で加療中、十六日未明死亡される。

他の教室員も教室内で爆死す。

故国房二三教授略歴

正四位勲四等医学博士　法医学教授

明治三十四年五月十六日福岡県に生る
昭和四年三月東京帝国大学医学部卒業
昭和四年四月京城帝国大学助手に任ぜられ法医学を専攻す
昭和六年五月京城帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十五年七月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和二十年五月陞叙高等官二等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い同月十六日鬼籍に列し転に殉ず

主なる研究題目

ABO式血液型の亜型の研究

死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
教授	国房二三
技術囑託	山口与作
雇	黒川マツ子
傭人	吉田マサエ

国房教授の思い出

佐藤武雄

原爆十周年記念に「国房教授の思い出」をと友永教授に乞われた。原爆と云えば多くの知友同僚を失つた自分には色々の思い出が蘇つて来る。中でも国房教授の思い出は一入切なるものがある。私が京城帝国大学法医学記念創設の任を帯びて赴任したのは昭和四年四月の事である。勿論京城に於て教室の人を求める事は困難であつた為め、母校東大に来て人を探し求めた。当時国房君は臨床をやるのはあまり好まないがとゆう考であつて、日赤中央病院へ行く様な話を聞き及んで、直ちに京城へ来て貰えないだろうかと交渉をした所、喜こんで来て呉れた。爾来京城に於ける私の生活には国房君と繋がるものが十有余年の間続いたのである。そして長崎の教授として迎えられて京城帝大の法医学教室を去るに至つたのである。この間の思い出の数々は到底限られた紙面ではそのすべてを尽す事が出来ない。茲にその一二を記し国房君の冥福を祈る次第である。

国房君が京城に赴任したのは、先づ私と同時であると云つてよい。その当時城大ではまだ卒業生も出ないので国房君と二人の教室生活が一年続いた。

当時私が「沈降素量と沈降素価」との研究を進めて居つたので二人で夜おそく迄教室で研究を続けていたものであつた。同君の仕事の仕振りを見ていると、なか〳〵手堅く且頭の仂きもよいので仕事は着々進んだ。家へ来て夕食を共にして又教室へ出かける様な事もあつた。食事を共にすると、同君はお菜を一皿宛平らげて他の皿に移る、決してあちらの皿もこちらの皿もと手をつけないので見ている方が稍々ハラハラする。「君それ嫌いなのかい？」と聞くと「いやこちらをすませてそちらに移ります」と云つた様な風で、なか〳〵特長のある食べ方をしたものだ。

当時京城を始めとして朝鮮全土に於ては、法医解剖を他の医者がして居つたので、解剖例数も少なかつたが、時を経るに従つて漸次その数も増して来、又活動範囲も広くなつて来て、屢々二人で朝鮮の奥地へ解剖に出かける様な事があつた。一つの解剖をして帰るのに一週間も費す様な僻地へ出かけた事もあつた。国房君が年齢に比較して老けて見え、私が比較的若く見えるもので、お互に無口である二人であつた為めもあろうが、食事の時など国房君が正座に進められるので同君はいつもその裁きに閉口して居た。後でコソ〳〵その事を僕に話し「先生どうかさつさと正座へ行つて下さい」と彼一流の笑顔で物語つて居たものだ。

僕が昭和六年に外国へ行く様になつて留守中を私に代つて教室の一切の事を約二年間見て居て呉れた。私が昭和八年の五月に帰つて来たので

あるが、不在中大した問題もなく過していて呉れたのに、昭和八年の四月に彼にとつて一大問題が起きた事がある。それは四月の十日頃、子供の首丈が路傍に捨てられてあつて胴体が発見されず、その首の鑑定をした問題である。胴体は私が帰朝してはじめて登学した日に奇しくも発見されて検査されて居る所であつた。その問題というのは首だけを検査鑑定した時の結論の内、死後経過時間の問題に関してであつた。国房君の判断は少しも誤つて居る所はなかつた。併しその首が埋葬されてある死体を堀り出し切断され、然も路傍に捨てられてあつたとゆう経過が判明して居らなかつた為めに素人考え的判断から云えば、事実と相違して居つたいう所から問題が起きて来たのである。この経緯を詳細に記せば長いことになるし、又興味ある事である。こゝでは思い出という記事であるから省略する事とする。要は国房君の誤まつた判断でないのに誤まつた如く宣伝して、それを或政治的の材料にしようと云う甚だけしからない司法警察官の悪意の現われである事がよく判つた。然も新聞記者がその人に躍らせられて、国房君を責めるので、国房君はもう法医は止め度いと私に云い出した。当時国房君の心中穏やかならざるもののあつた事は推察するに餘りある所であつた。私は国房君に「君の判断が法医学的に見て誤まつているものでない事は明確である。如何に隠謀を巡らせられ様とも僕が矢表に立つて全部を引き受けてやる、そんな弱気を出すな。馬鹿程こわいものはない、馬鹿相手のけんかはするものでない」と云つて慰めてやつた。そしたら又意を翻して法医を専念する事になつた。

昭和十年に発覚された例の世を震駭した集団殺人事件、銘して「白々教事件」なるものの処理に当つても数々の思い出が走馬燈の如く私の頭に去来する。私が京城帝大の医学部長になつて教室の事をあまり面倒を見る事が出来なくなつてからも実に国房君はよく教室の事の面倒を見て呉れた。長崎の教授に栄転する時は私にとつて実に手離し難い人物であつたが、本人の将来を考えて喜こんで送り出した。長崎へ行つてからの仕事もなか〳〵頭脳明快な仕事を切り拓いていたのに、戦争が烈しくなり有意の才を抱き乍ら、思う様に研究も進められず、遂に原爆によつて倒れるに至つたことは、本人も嘸かし残念であろうし、私も実によい人を失なつたと悲しんで居る。当時国房君の死を私はおくれて郷里で受けて亜然とした。考えて見れば実に同君は不運であつた。明眸才媛なる夫人を、長崎へ赴任して間もなく失い、又その後を追うて自分自ら原爆の犠牲になつたとは……。今日迄彼が健在で研究を進めて居たら、恐らく劃期的の研究を成就していたであろうのに。原爆十周年記念に当つて聊か追憶を記し、御令息方のその後や如何にと思いを走らせて筆を擱くことにする。

（信州大学学長）

国房二三教授を偲ぶ

友永得郎

昭和三十年八月九日、十たび周り来し原爆忌、例年の様にグビロが丘の慰霊碑の前に黙禱を捧げる私どもの頭上には十年前のこの日と同じく晴れ渡つた空から灼けつく様な太陽がかゞやいている。十年の歳月は短

かくして又長い。この期に静かに故国房二三教授を偲び筆のおもむくまゝに記して故人の冥福を祈る。

国房教授が長崎の法医学教授として着任されたのは昭和十五年七月で、当時京城の佐藤武雄教授の下に助教授であつた同氏は北条教授の九大転任の後を受けついだのであつた。私の恩師である千葉の加賀谷先生と佐藤教授とは非常に親しい間がらであつた関係上、私と国房氏との間にも何となく相通ずるものがあつた。しかし国房氏の長崎着任前は京城と云う地理的関係で毎年の学会には余り顔を見せなかつた様に思う。そのためか私には長崎以前の同氏については、これと云う思い出もない。

国房氏が長崎に着任された翌年、昭和十六年の法医学会は四月に台北で開催された。その学会出席の往路に私は国房氏と同じ船、香取丸に乗り合せ、しかも同じ食卓が割当てられた。食卓の四人の中ほかの二人は船の事務長と青森の或会社の幹部の人であつた。その時食卓に出されたリンゴの事で国房氏と青森氏との意見が対立した――国房氏は朝鮮リンゴがうまいと主張し青森氏は青森のリンゴの方がうまいと云う、両方とも仲々頑固で自説を曲げない。次の食事の時に又その論争を蒸し返すと云つたありさまで、私と事務長とは只ニヤ〳〵笑つて聞いているより仕方がなかつた。この時はじめて私は国房氏の真面目に触れた様な気がした。重い少しかすれた声で口角泡をとばさんばかり一歩もゆずらないのである。――やがて国房氏曰く「あなたは朝鮮リンゴをどこで食べましたか」、青森氏曰く「東京で食べました」、国房氏「それではだめです。朝鮮リンゴは朝鮮で食べなければほんとの味はわからない」。青森氏「それではあなたは青森のリンゴをどこでたべましたか」。国房氏「勿論東京で」。青森氏「それではほんとの味はわからない。やはり青森でたべなければ」――そこで私は横合から口を出した「それではどちらがうまいか私が判定しましよう。後日私のところへ両方から一番うまいリンゴを送つて下さい」。これでどうやらリンゴ論議は大笑いの中に解消した。（その年の終りには太平洋戦争となり、香取丸も間もなく撃沈されてしまつた）

台北の学会の席上では今一つ国房氏の真面目を見せられた。それは某教授が教室員の演題を代演したのであるが、その内容が溺死の診断に関する事で、私がすでに数年前から学会で二回に亘つて報告したものと規を一にしたものであつた。これに対し国房氏質問して曰く「溺死の診断については既に友永氏が前の学会で報告しているが演者はその抄録をお読みになつたか」。某教授「まだ読んでいない」。ここにおいて国房氏憤然と色をなして「いやしくも学会で研究報告をなさんとする者が前の学会の記録を読んでいないとは何事であるか」と叱咤したので某教授は一言もなかつた。当の私は余り突然の応酬であつたので、只ぼんやり聞いていたのであるが私のささやかな報告にもよく注目しておられた同氏に、更めてひそかに敬意を表した事であつた。はからずも私が国房氏のあとを受けて長崎に着任してから溺死の研究に手をつけた際、この学会での出来事がふいと思い出されて妙な因縁だと思つた。

台北の学会のあと見学旅行に行を共にしたが、阿里山の宿で山頂の日の出を拝せんと早朝何名かで頂上の展望台に登つた。この時偶々国房教授のところの鹿毛君が撮した写真が今でも残つているが、それは大きな檜の切株に空を背にして中央に加賀谷先生が立たれ両脇に国房教授と私とが蹲んでいるもので、この写真も私には何か因縁めいたものを感じさ

せるのである。

もう一つ、これも因縁ばなしになりそうだが、国房教授は着任以来「血液型の亜型の研究」に力を注いでおられた様で、昭和十八年の法医学会では、亜型の記号を「1、2、3……」とし、部分抗原の記号を「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……」とする事を提案され、それまで多少区々であつた記号が統一される様になつた。昭和二十年の法医学会には「ＡＢＯ式血液型の亜型の研究」の題目で宿題報告を担当される事に予定されていたのであるが、戦局は次第に逼迫して昭和十九年の法医学会は十一月五日に開催されたが、僅か十数名の出席で東大の講堂の床下に空襲を避けながら行われた状態であり、昭和二十年の学会は遂に開催不能となつてしまつた。しかも国房教授は原爆にたおれ「ＡＢＯ式血液型の亜型の研究」の宿題報告もそのまゝになつてしまつた。それから十年、明昭和三十一年には当長崎で法医学会が開かれる事になつており、その際のシンポジウムの題目は偶然にも「血液型の亜型の問題」と予定されている。

国房教授は長崎に着任後奥様を亡くされ、その後再婚されたが、いくばくもなく国房教授が亡くなられると云う非運に遇われた。奥様は仙台の御実家に戻られ、魁、透、尚の三人の御子息は夫々東京の御親戚等に引きとられた由、今では立派に成人なされていられる事と拝察する。

（法医学教室）

戦時下の法医学教室

徳川武夫

私が法医学教室と関係を持つ様になつたのは、卒業後産婦人科教室に入つてからだつた。

当時故清水教授から血清学に関係あるテーマを貰い、その標準血清作成の指導を当時在局中の谷口先生に御願いしてからでした。昭和十二年八月、支那事変に応召し同十五年に教室に帰つた。同年九月頃か国房教授が城大から来任された。翌十六年三月、清水教授が停年退転されたので、同教授の紹介で四月から法医教室に入つた。当時は植村、鹿毛、徳永、古川、関本、諸氏が在局中だつたと思う。この頃は未だ実験材料も豊富で割合のび〳〵と仕事が出来た様だつた。再び同年七月召集を受け、約二年後教室に戻つた。

その時の在局教室員は植村、菊地、朝鮮から来た香川、北京大学からの当学生、張、それに前川の諸氏だつたと思う。段々戦争も深刻になつて、防空壕作りや、食糧増産が叫ばれ、到る処空地利用の家庭菜園が造られることになり、法医でも空地は全部耕して薯、野菜等の自給自足を計つた。その時国房教授も自分で鍬を持つて畑を耕された。

これより先、私の第二回目の召集直後、仮初の病で奥さんが亡くなられた。その後三人の子供さんを長い間育てられ、その間の研究指導等仲々の事ではなかつたろうかと思われる。その当時の教室での主な仕事は、宿題報告予定の血液型の亜型と取り組んで着々とその成績を挙げられて

いた。徳永のA₁A₂型、香川のB₁B₂型、前川諸氏のO₁、O₂型、の研究、それに私のM・N型等である。その外純法医学的研究としては、植村の水中急死、菊地の窒息死の研究等々であつた。

その間にも長崎市民の血液型の検査を主唱され、全学を挙げて実施した。それに要する標準血清の作成、調整及ひ検査の指導監督に教室こぞつて従事した事もあつた。

法医解剖もその間着々と施行され国房教授の解剖実施五〇〇体記念祝を教室で行なつた。

坑血清作成後の家鶏、家兎は蛋白質不足の折の教室の唯一の蛋白供給源として、今はないあの広い第一実験室で、血液を供与して呉れた学生を混じえてのさゝやかな、然し楽しいパーテーのひと時もあつた。

昭和二十年初、日本敗色濃しと見てか朝鮮から来ていた香川は業半ばにして突然引き揚げてからは教室員も段々少なくなり、教室はがらんとしていた。然し研究は続けられた。即ち、教授との共同研究の遷延性ショック死の疑点の解明研究や、急性一酸化炭素中毒死の血液凝固時間に及ぼす影響、及び欧、亜、インドネシヤ人の血液型の亜型の頻度の研究成績等々は原爆で一片の灰と帰した。これより前、二十年の六月には私も長崎要塞司令部に内地召集を受けた。

八月九日原爆当日は、私は出張で長崎には居なかつたが、翌日帰つて長崎を遠望した時の驚きは今も明かに脳裡に映じて居る。早速大学へ行つた。一望灰燼の中にコンクリートの部分だけが残つている。法医教室は勿論爆風に吹き飛ばされ、大部分は燃えていた。図書室の図書は遠く大学の門前近くまで散乱して居り、大丈夫だと思つて重要なものを入れてあつた解剖室の半地下室内のものは一物をも残さず燃えて居り、実験器械、ガラス器具、図書など漸くその形を残しているに過ぎなかつた。技術員の山口君、雇員の山口、黒川嬢など実験室の瓦礫の中に見出された。

国房教授は教室の東側の道路近くまで爆風に吹き飛ばされ、一夜を近くの防空壕に明かし、私が行つた時は、小児科の半地下室の莚の上に、高熱と熱傷と食思不振と頑固な下痢に悩まされて居られたが意識は明瞭だつた。先づ解剖室下の半地下室の安否を問われた。既に消失した事を話したら暫く暗然として居られた。今になつてみれば云わなければよかつたと後悔している。角尾学長も、山根教授も、元高南病棟地下の防空壕に、重症の身を横たえられていた。

私も軍務の傍ら、桜馬場町の自宅に帰られ静養中の先生のところに度々出かけた。矢張り高熱、下痢、食思不振と外傷に悩まされて居られた。八月十五日未明、今日は飛行機が飛ばないなあ、何だか淋しい様だなあと云われ乍ら、最後まで意識明瞭で終戦を知らずして、遂に原爆の犠牲となられ他界された。翌十六日、遺骸について大学に行き、元高南病棟横のテニスコートで、夫人、佐野教授、私外数人の淋しいみとりの下に荼毘に附した。

その後約一年、友永教授の来任まで法医教室を御預りしていたが、一身上の都合で大学を去つた。

今、静かに先生と共に過した数年間を考えてみると、走馬燈の様に消え浮ぶ思い出から残るものは、あゝいゝ先生だつたなあと云う事だけである。願わくば先生の霊よ、永久に幸あれ。